



国立競技場の設計手法に学ぶ

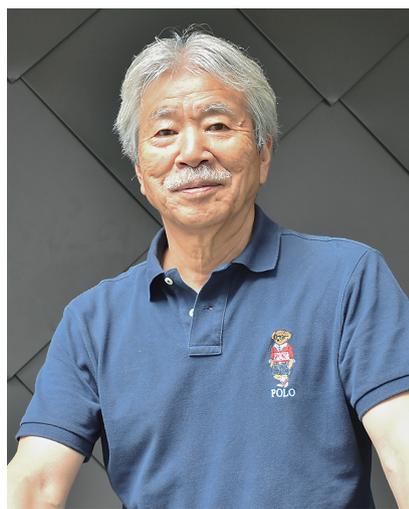
国立競技場の竣工から間もなく6年。建設過程におけるユニバーサルデザイン関連の取り組みをまとめた書籍が、建築物のバリアフリー設計のガイドライン改正に合わせて出版された。(聞き手は山崎颯汰)

——高橋さんは国立競技場のプロジェクトで、ユニバーサルデザインアドバイザーを担当されていました。

2015年に当初のザハ・ハニド案が撤回された後、「世界最高水準のユニバーサルデザイン」を目指し、業務要求水準について発注者に助言してきました。重視したのは、基準や数値の設定以上に、実際に施設を利用する高齢者や障害者など様々な立場の利用想定者(当事者)の声を施設に反映することでした。

日本視覚障害者団体連合や日本障がい者スポーツ協会など14の団体の代表者と、設計者や施工者、発注者が一堂に会して議論するワークショップの場を設けました。設計図書の内容について、「何が障害になりそうか」「どうすれば解決できるか」などを共有しました。

約3年半で、20回以上もワーク



高橋儀平(たかはしげい)氏
東洋大学名誉教授

1948年埼玉県生まれ。72年東洋大学工学部建築学科卒業。2003年に同学科教授に就任。ハードビル法やバリアフリー法の各種制度に携わり、ユニバーサルデザインを推進(写真:本誌)

ショップを開き、設計段階から継続して取り組めたことは、国内では前例のないことだったと思います。

——ワークショップでは、どのような議論がありましたか。

多くのテーマがありましたが、印象的だったのは視覚障害者誘導用ブロックに関する議論です。日本産業規格(JIS)では高さ5mmと定められていますが、車椅子やベビーカーを利用する人、足が不自由な人から「つまずきやすい」などの声が出ました。

そこで、高さ2.5mmのブロックを用意し、体験してもらいました。視覚障害者が足裏で識別できるかなどを確認した上で、採用を決めました。当事

Book Data



当事者参画の ユニバーサルデザイン 対話から成し遂げた国立競技場

- 著者:高橋儀平・佐藤克志・川野久雄・古田安人・墓田京平・草ヶ谷友則
- 編者:高橋儀平
- 出版社:彰国社
- 定価:3740円(税込み)
- ページ数:240ページ
- 発行日:2025年5月20日

者の声と体験を通じて、新しい解決策を提示できた意義は大きかったと思います。

——ユニバーサルデザインを進める上で、これから設計者にはどのような姿勢が求められますか。

ユニバーサルデザインに関する基準や数値は既に定められていますが、それを満たせばよいという姿勢では不十分です。

25年5月30日に国土交通省が改正した、バリアフリー設計に関するガイドラインには、国立競技場で得た知見も反映されています。基準や数値は今後も見直していくことになるでしょう。だからこそ設計者には、当事者の声を直接聞いて、基準の根拠や背景まで理解してほしいです。

多様化するニーズを施設に最大限反映させることが、これからの設計者の責務ではないでしょうか。